

博士課程教育リーディングプログラム 平成25年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成24年度		
申請大学名	九州大学	申請大学長名	有川 節夫
申請類型	複合領域型（環境）	プログラム責任者名	中島 英治
整理番号	H02	プログラムコーディネーター名	原田 明
プログラム名	グリーンアジア国際戦略プログラム		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

本事業の目的は、グリーン化と経済成長を両立したアジア（グリーンアジア）の実現に資する理工系リーダーの養成にある。資源消費の飛躍的削減と経済成長との両立は、人類社会の課題である。そして、アジアは、文化・社会的な多様性を内包し、経済成長と環境問題との相互矛盾を抱えつつも、活力あるメルティングポット状態となって発展しつつある典型的なモデル地区としての意味を有する。経済成長と資源利用効率向上の両立という人類が経験したことのない困難な課題を解決するため、産官学連携・国際協働の下、3つの学術分野〔物質材料科学・システム工学・資源工学〕のいずれかを専門とし、自身の専門プラス他の2専門分野、および3分野の総体としての環境学、加えて理工学を支えるためのアジア・オセアニア諸国の社会学・経済学の基礎を複合的に修得、さらに、国内外の実践経験を積み、理工系リーダーとなるに相応しい5つの力〔研究力・実践力・俯瞰力・国際力・牽引力〕を獲得、かつアジア人材ネットワークを有する人材の育成を行う。

九州大学は、教育憲章や学術憲章に示されるように、教育においては、世界の人々から支持される高等教育を推進し、広く世界において指導的な役割を果たし活躍する人材を輩出し、世界の発展に貢献することを目指している。研究においては、人類が長きにわたって遂行してきた真理探求とそこに結実した人間的叡知を尊び、これを将来に伝えてゆくとともに、諸々の学問における伝統を基盤として新しい展望を開き、世界に誇り得る先進的な知的成果を産み出してゆくことを自らの使命として定めている。このためには、自由闊達な発想と洞察をもって、常に高みを目指し、新しい地平を切り開いてゆく絶えざる挑戦が求められるが、平成7年に独自に「改革の大綱案」を策定し、学府・研究院制度を始めとする構造的な改革に取り組んできている。平成16年度の法人化以降は、明確な目標・計画を掲げ、総長のリーダーシップの下で、様々な大事業や大改革が進められている。改革の具体的内容は次の8点に集約される：1) 博士・修士・学士課程教育の系統性：学士・修士一貫と博士一貫の併存、2) 教育組織と研究組織の分離と管理運営システム：研究科・系教育と研究院の分離と連携、3) COE構築のための柔軟な協力システム、4) 柔軟で開かれた系の教育システム、5) 研究科と系の再編、6) 附置研究所・附属研究施設等の改革、7) 社会との連携の強化、8) 国際的連携の強化。それぞれが本プログラムに深く関わっているが、特に本プログラムは学内の4つの専攻を中心に、6つの研究院、2つの付置研究所、1つの研究機構、新規開設を含む4つの教育・研究センターの協力の下、文理協働・社会連携・国際連携の推進を掲げ、5年一貫の新しいタイプの博士課程教育システムの構築を目指すものとなっている。

2. プログラムの進捗状況

採択後 2 年度目にあたる平成25年度の計画は、初年度に整備されたシステムに沿って順調に実施された。具体的には以下の通り。

(1) 運営体制の整備：

① 初年度採用者（特定プロジェクト教員 8 名、テクニカルスタッフ 4 名、事務補佐員 6 名）に加え、特定プロジェクト教員（学術研究員）1 名、テクニカルスタッフ 2 名を補充採用し、プログラム運営主体のグリーンアジア 国際リーダー教育センターに配置した。②機動的運営のため各種委員会およびワーキンググループ（WG）の構成を改善した。これら委員会等メンバーも含めた拡大運営委員会を月 1 回、学務委員会を月 2 回平均で開催するとともに、必要な海外入試WG、国内募集WG等を設置した。なお、学務関係委員会は英語により実施した。

(2) 教育プログラムの実施と整備：

①第2期生の選抜試験を実施し、16名（国内 7 名、海外 9 名）を受け入れた。また、留学生募集方法の抜本的改善のため Web を活用した新しい募集方式を開発して、第 3 期の留学生募集・スクリーニングを進めた。②理工系、人文社会系の講義、英語演習を手配、開講した。人文社会系科目に関しては、特定プロジェクト教員による講義、本学大学院共通講義を利用する講義の他、非常勤講師を手配して集中講義形式でも実施した。③第 1 期生のプラクティススクール、第 1 期生および第 2 期生の研究室ローテーションを手配、実施した。④第 2 期生を中心にマレーシア演習事前研修及びマレーシア実習を実施した。⑤グリーンアジア国際セミナーを開催するとともに、「グリーンアジア学生フォーラム」を併設して学生討論を実施した。⑥コース生を対象とした小セミナー（アフタヌーンコロキウム）を計 7 回開催した。⑦グリーンアジアレクチャーシリーズとして外国人講演会を 2 回、英語による日本人講演会を 1 回開催、他共催イベントを実施した。⑧第 1 期生に対する博士研究開始資格認定審査（QE）の実施方法を検討、実施した。⑨コース生の成績の管理等の方法を整備した。

(3) 連携体制の整備、連携企画の実施：

①12月に第 3 回国際アドバイザリーボード会議を開催し、国際連携先と今後の進め方等に関して協議を行った。②国内連携先、企業連携先、自治体連携先を訪問し、昨年度の実施報告をするとともに今後の進め方等に関して個別協議を行った。③国際連携及び国内連携の試行を兼ねて、タイ実習事前研修、マレーシア演習事前研修及びマレーシア実習を実施した。④留学生のリクルーティング、スクリーニングの手続きを、1) 自前 Web の抜本的改修、欧米の留学プログラム検索サイトへの有料広告掲載等を通じて情報発信力を強化、2) Web での出願プロセスへの完全移行など従来の国内大学院には見られない枠組みにシステム化した。波及効果として、この新手法が、本プログラムの主たる運営母体である総合理工学府博士後期課程の文科省留学生優先配置プログラム（Brain Circulation アカデミック育成のためのグリーン理工学国際コース / Intellectual Exchanges and Innovation Program ; H26-30 採択）で適用される。

(4) 広報活動：

①パンフレット（簡易日本語版、日本語版、簡易英語版、英語版）を作成し、各所に配布した。②学内、国内、海外に向けた入試説明会をそれぞれ複数回実施した。③ホームページ（日本語版、英語版）の大幅な改善・刷新を図った。④ニュースレター及び環境関連総合誌 EVERGREEN を企画編集し、発行した。⑤グリーンレクチャーブックシリーズ（英語版教科書）を企画した。⑥九州大学のプレスリリース、九州大学広報誌、九州大学 University Information、北海道大学との合同による研究活動報告会、リーディングフォーラム 2014 等、機会をとらえて本プログラム内容を広報した。